

編集部レポート

トヨタファーム／養豚 (愛知県支部法人会員)



鋤柄さん親子と現在お世話になっている実習生

1984年から現在まで、途切れることなくオイスカからの「委託研修生」、「技能実習生」を受け入れているトヨタファーム。前身の堤畜産を立ち上げた鋤柄耕一さんと、現在トヨタファームの代表を務める鋤柄雄一さんは、父子2代にわたり多くの研修生や実習生の指導を続けているだけでなく、彼らの帰国後の活動を、さまざまな形で支援をしています。今年で受け入れ36年目となる今、どのような思いで海外の青年を育ててこられたのか、お二人にお話を伺ってきました。

家族のように一委託研修時代

オイスカを知ったのは、研修生を短期のホームステイで迎え入れていたという親戚の紹介だったそうです。耕一さんに委託研修生を受け入れはじめた理由を尋ねると、「人手不足だったから」と一言。しかし、トヨタファーム(当時堤畜産)が運営する、つつみ食堂の上階を研修生の宿舎として貸し出し、仕事中はもちろん食事も一緒。朝から晩まで共に過ごし、養豚の技術指導を厳しく行う一方、どの研修生も冬には必ずスキーに連れて行くなど、研修生を家族のように思っていたと言います。初めての受け入れから一貫して、単なる労働力として接するのではなく、「人づくり」を自然体で行ってこられたことが伝わってきました。また、研修生も耕一さんを「おとうさん」と呼び、帰国後も手紙が届くなど(写真①)、研修で得たものが技術だけではなくたことがうかがえました。

帰国後の活躍の場をつくる

鋤柄さん親子による「人づくり」への思いは、研修生や実習生の将来にもわたっています。父耕一さんは、帰国後も研修生をサポートしたいという思いから、フィリピンのパラワンとバゴの両研修センターに豚舎を建て、自らも何度も足を運んで、現地の研修生を指導されました。

そして、跡を継いだ雄一さんも、2015年からミャンマーの技能実習生を受け入れ始めたことから同国へ足を運び(写真②)、18年にはセンター近隣の農村を視察。現地農家向けの養豚セミナーで講義を行い、翌年にはトヨタファームの職員をオイスカが企画したミャンマーツアーに参加させるなど、耕一さんの思いを受け継いで、実習生の将来やふるさとの発展をも見据えた支援を行っています。

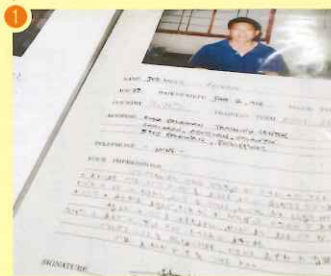
また、トヨタファームの第一期実習生のゼーヤー・ソ一は、日本で得た知識と技術を活かし、帰国後に現地研

修センターの養豚指導員として活動する一方、ミャンマーの農村地域で初となる人工授精の普及に成功しています。これまでの委託研修生・実習生OBの活躍とともに、養豚によるミャンマーの農村開発への挑戦が少しずつ始まっています。

技能実習という「国際協力」

「オイスカには、各国にセンターやネットワークがあり、実習生が帰国してから活躍できる土壌がある」と雄一さん。帰国した実習生には「養豚で成功してほしい」「ふるさとの発展のためのリーダーになってほしい」と期待しています。その一方で、帰国して1年は、御礼奉公としてオイスカのセンターで働くようにと話しているそうです。そして、順次実習を修了したOBがそれを引き継ぎ、センターを基盤として技術が根付いて、さらなる人材が育つことも心にかけてくださっています。

技能実習制度は、もとより「国際協力」を目的としています。しかし、お二人は、その制度ができる以前から技術と精神を育て、各々の「ふるさと」の発展に寄与する人材を育成するというオイスカのビジョンと共鳴する形で、長らく海外の青年を指導しており、まさにオイスカが目指す「人づくり」の一つの理想の姿を実現されているように感じられました。



受け入れた全ての青年の情報をまとめた手作りのファイル。一人ひとりの写真とともに研修を終えた研修生からのメッセージが添えられ、どの文面にも「おとうさん」「ありがとうございます」の言葉が見られる



トヨタファームで短期研修を行った研修生OBと再会。研修は2週間と短かったにもかかわらず、学んだことを活かして帰国後も活躍する様子を見て、技能実習生のミャンマーからの受け入れを決めたという